

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2022年2月10日

春立ちぬ

先日の朝、目が覚めて、ストーブに灯油を足した後、車のフロントガラスが凍っていたら解かそうと思って外に出ました。玄関から一歩外に出たら、空が明るい水色をしていました。寝ぼけまなこで「あれ、春が来た？」と思いました。ふと気がつく、2月3日、立春の朝でした。季節とはこんなふうにやってくるのだなあ、と感心しました。

知性について考えてみた

私たちは普段何気なく、「〇〇君、また学年トップだって。頭いいよね」とか「また同じところでミスった！オレって本当にアタマ悪いなあ」という言い方をしています。しかし、この「頭がいい」とはどういう状態、どんな人をさすのでしょうか。君は、今まで出会った中で「この人、アタマいいなあ〜！」と思った人はいますか？

筆者の場合は、二人の人物が思い浮かびました。

一人目は茨高の同級生だったK君です。高校2年の時に同じクラスになりました。座席が五十音順だったことから、同じ「K」で席が近く親しくなりました。K君は、今で言う“地頭”がいいタイプで、特に数学や物理が得意でした。その一方で文系の知識も豊富で、筆者が名前しか聞いたことのない外国の小説をたくさん読んでいました。K君は頭がいいうえにガリ勉でした。実に堂々とガリ勉をするので、それがあたりまえでイヤミな感じはしません。こう書くと、真面目な優等生タイプを想像した人もいるかもしれませんが、やんちゃな人の比率が高い海沿いの地域（偏見？海沿いの人ごめん）に住んでいたK君はむしろ逆で、地元での武勇談などもよく聞かせてくれました。昼休み、友人たちと集まって下ネタで盛り上がっていると（男子校あるある笑）、ニコニコしながら参考書片手に参戦してくるというような強者（つわもの）でした。数学の問題を質問すると、「なんでこの問題がわからないの？」と、まったくイヤミのない素直な驚きとともにわかりやすく教えてくれました。京都大学に進学し、研究者の道に進んだと聞いています。

二人目は、現在、立命館アジア太平洋大学学長の出口治明氏です。数年前、私立学校の教員を対象とした研修会で講演をうかがう機会がありました。出口氏は日本生命株式会社でロンドン現地法人社長などの要職を歴任した後、自らライフネット生命株式会社を設立、代表取締役社長に就任した経歴をお持ちですが、本業とは別に、大変な歴史通でもあります。『全世界史（上下）』出口治明著（新潮文庫）を読んで、こんなにおもしろわかりやすく歴史を語る人はどんな人だろう？と楽しみに研修会に出席しました。教育問題をテ

一マにした講演は、幅広い知識と深い洞察にもとづき、時にユーモアやアイロニーを交えた、実に明快でおもしろい内容でした。講演を聞きながら“ひきこまれる”とはこういうことをいうのだなあ、と実感しました。その後にも出口氏の著作を何冊か読ませていただきましたが、読むたびに発見があり、様々な気づきに出会えます。現代の“知の巨人”と呼ばれていることも納得できます。

ここ数年、教育分野や社会の中で“学力”の定義が変化していることを感じます。十数年前から学力に対する考え方が少しずつ変わり始めていましたが、その速度が増してきています。その変化を推進しているものの一つが、中学は2021年、高校では2022年度から導入の新学習指導要領であることはまちがいありません。新学習指導要領総則では、学校教育が育成を目指す資質・能力として「知識および技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性」があげられ、そのために「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善が求められています。

上記の目標のうち、長い間、私たちが“学力”と認識していたのは“知識・技能”でした。たくさんの知識を暗記していること、文章を素早く読解したり、問題を解いてあらかじめ準備された正解に行きつく技能に優れていることが“頭がいい”ことの条件だと考えられてきました。

今回の学習指導要領改訂にあたり、育成すべき学力の見直しについて産業界からの強い要望があったと聞きます。グローバル化の渦中で、国内外の厳しい競争に直面するビジネスの世界では、ペーパーテストの偏差値が高いだけの秀才では現実の問題に対処できず、正解の見えない課題に対しても、あきらめずに自分の頭で粘り強く考え、その考えを仲間と共有し協働できる能力、生涯をつうじて学び続け、自ら成長し続けようとする意志をもった人材が求められているのです。

もうすこし掘り下げて考えてみましょう。そもそも人間の「知」とはどんなものなのでしょう。

19世紀にフレドリヒ・ニーチェによって書かれた『ツアラトウストラはかく語りき』の冒頭で、賢者ツアラトウストラは、ある朝、十年の間みずからの精神をよるこび、孤独をたのしんだ山中の洞窟での生活に別れを告げ、山を下り、人間の住む世界へもどることを決意します。ツアラトウストラは朝焼けの太陽にむかって語りかけます。「君よ。大いなる星よ。いったい君の幸福もなにものであろうか、もし君にひかり照らす相手がいなかったならば」「見よ。わたしもみずからの知恵に飽きた。あまりにもおびただしく蜜をあつめた蜜蜂のように。わたしは手を必要とする、わたしの知恵にむかってさしのべられるあまたの（※たくさんの）手を」

このツアラトウストラのことばは、「知」というものが、堅固な象牙の塔の中に守られて存在するものではなく、発信され、共有されることによって、はじめて「知」となりうる類いのものであることを示しているように思います。

想像してみてください。一人の天才が、ある日突然、世界のすべての謎を解き明かす真理を悟ったとします。しかし、天才はその真理を誰にも告げず、自分の頭脳の中に閉じ込

めたまま、やがてこの世を去ってしまいます。彼が発見した深遠な真理は、誰かに伝えられることもなく、誰かに検証されることもなく永遠に失われるのです。そのような知識を果たして「知」と呼ぶことができるでしょうか？

「無知の知」という有名な言葉を残した古代ギリシア、アテナイの哲人ソクラテスは、知を求める手段として対話を重んじました。

当時のアテナイでは、ソフィストと呼ばれる知識人たちが議論で相手を言い負かすための弁論術を若者たちに教えていました。弁論術とは、結論が先にあり、その結論を受け入れさせることを目的とした相手を言い負かすための技術です。どんなに論理的であっても、その議論は結論を導くためのものに過ぎず、論じられている事柄の是非を検証することはありません。

これに対してソクラテスの対話は、議論する者同士で一つ一つの問題に合意し、確認していくという手続きをとります。結論が先行することはありません。対話を続ける中で、自分の考えと相手の考えが相対化され、新たな視点が生じることが期待できます。仮に結論が出ない場合でも、結論に近づくことはできます。例えば「正義とは何か」という対話が行われ、私たちは「正義とは何か」を知らない、という一致点に至ることもありえるわけです。

近年、研修会などに出席すると、よく「ブレインストーミング」というものにお目にかかります。ミーティングに参加する複数の人たちが、限られた時間の中で次から次へと自由にアイデアを出し合います。質より量を重視し、できるだけたくさんのアイデアを、まさに脳みそを嵐のように働かせて、付箋などにメモして出し続けます。他人のアイデアを否定するのはNGです。結論、判断を急がず、複数のアイデアを組み合わせることで新しい発想を生み出す手法です。

ソクラテスの「対話」とブレインストーミングを一緒にするのは少し乱暴かもしれませんが、意見や考えを自由に発信し、お互いに検証し合い、柔軟な議論の中で新たな「知」にいたろうとするというところに共通点があるような気がします。

もちろん、ひとり自分の思いの中に沈み、静かに考えをめぐらすことで深められる「知」もあります。

「つれづれなるままに、日暮し硯（すずり）に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」という有名な文章を残した兼好法師はこのタイプだったのかもしれませんが。ちなみに解釈すると「することもなく退屈なのにまかせて、一日中硯に向かって、心に浮かんでは消えていく他愛もないことを、とりとめもなく紙に書き付けていると、奇妙に物狂おしい気持ちになる」というほどの意味です。

兼好法師は、隠棲生活をおくる山中の小さな庵で、日がな一日硯の前に座り、自分自身と向かい合ったのだと思います。それは自分自身との静かな深い対話だったのかもしれませんが。そして心に浮かぶとりとめもない思いを短い文章にしたためていくのです。こうして生まれたのが、隠者文学の傑作『徒然草』です。

兼好法師は“書く”という行為を通じて、自分の考えを相対化しました。他者から検証可能なものとしたのです。『徒然草』が書かれて七百年。そこに込められた「知」の数々は、今も道標となって多くの人々を導いています。

2016年の東京大学前期入試国語の第一問に、内田樹（たつる）著「反知性主義者たちの肖像」が問題文として出題されました。

内田氏は、ロラン・バルトの「無知とは知識の欠如では無く、知識に飽和されているせいで未知のものを受け容れることができなくなった状態を言う」という言葉を引用したうえで、未知のものに対して「自分はよく知らない」と認め、他人の意見を黙って聞き、得心がいったかどうかを自分の内側を見つめて判断する人を「知性的な人」とみなす、と述べています。そういう人は、単に新たな知識や情報を加算しているのではなく、自分の知的な枠組みそのものをそのつど作り替え、知の自己刷新（さっしん）をおこなっている、とも書かれています。

逆に知性的ではない人、「反知性主義者」は、理非の判断を他者にゆだねることをしません。「理非の判断はすでに済んでいる」「あなたが何を考えようと、それによって私の主張することの真理性には何の影響もおよぼさない」という立場をとります。

反知性主義者が上記のような態度になるのは「彼が知性を属人的な（※個人に属する）資質や能力だと思っているから」だ、と内田氏はいいます。それでは内田氏は知性についてどのような考え方を持っているのでしょうか。問題文を一部引用します。

「私は、知性というのは個人に属するものというより、“集団的な現象”だと考えている。人間は集団として情報を採り入れ、その重要度を衡量（※重さや量をはかる）し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う。その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の全体を「知性」と呼びたいと私は思うのである。」

難しい言葉づかいがあって、中学生の諸君には少しわかりにくいかもしれませんね。誤りを恐れずに易しく言い換えるなら、「知性とは、個人ではなく集団に属するものであり、その集団がある情報に接して、その情報が重要かどうか、どんな意味か、それに対してどう対応するかなどについて、集団として一致した意見を持つようとするとき、その集団を動かすエネルギーとなる力である」といった意味でしょうか。内田氏の考える知性も、共有され、検証されることによってはじめて「知」となる性質を持っているといえるでしょう。

内田氏はこうも述べています。「その人がいることによって、その人の発言やふるまいによって、彼の属する集団全体の知的パフォーマンスが、彼がいない場合よりも高まった場合に、事後的にその人は『知性的』な人物だったと判定される」

君たちのまわりにも、その先生の話や聞くと勉強に対する意欲がわいてきたり、その友達と一緒にいると新しいことにチャレンジしたくなったりする人はいませんか。それが本当の「知性」を持った人なのです。逆にいうと、どんなに物知りで偏差値が高くても、まわりの意欲を低下させ、活発に創意工夫する雰囲気を見失わせる人は、「反知性的」人物だということです。

この文章を書いている2022年2月8日現在、世界にはさまざまな問題がひしめきあっています。

NATO加盟をめざすウクライナはロシアと対立を深め、軍事圧力を強めるロシアに欧米諸国が反発しています。アメリカやドイツは、ロシアが軍事侵攻に踏み切った場合大規模な経済制裁を科す方針を表明し、専門家からは、ウクライナ情勢がヨーロッパを巻き込む大規模な紛争に発展することをあやぶむ声があがっています。

新型コロナウイルス感染拡大第6波は日本中で猛威をふるい、感染者数は過去の感染拡大とは比較にならないほどの規模となっています。政府は3回目のワクチン接種を加速させるとしていますが、今後ワクチンや抗ウイルス剤によって一時的に感染がおさまっても、ウイルスは生き延びるための新たな変異を起こし耐性をもった別の変異種が出現するため、ウイルスとの戦いは長期化する、との見通しもあります。

華やかな冬季北京オリンピックの陰で、新疆ウイグル自治区では文化的ジェノサイドともいわれる深刻な人権侵害が発生している、との報道があります。しかし、その情報は限定的で、かつ内政干渉にあたるとの中国側の主張もあり、世界は有効な対策をうち出せていません。

ミャンマーでは、2月1日、軍がクーデターで政権を掌握して1年になるのに合わせて、市民らの軍への抗議を表明する「沈黙のストライキ」が行われました。軍の弾圧を恐れる人々が国境の外に避難し、アウンサン・スーチー氏ら民主派の政治指導者たちは拘束されたままです。

私たち現生人類の学名はホモ・サピエンス、「知恵のある人」という意味です。人類の知は、これらの問題にどう立ち向かい、どのような道筋を示すことができるのでしょうか。知は集団に属し、対話によって共有され、相対化されて、合意形成のプロセスで集団を駆動する働きをもちます。私たちの知には、今日よりも少しでもよい明日を築く力があることを信じたいと思います。